令和5年度　学校経営計画・学校評価シート

高知県立高知江の口特別支援学校高知大学医学部附属病院分校

《高知県の教育の基本理念》	（1）学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたち （2）郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材	《目指すべき姿》	学校像	（1）調和のとれた全人的発達 ①困難を克服する強固な意志を育て、明朗で豊かな心情を培う ②生活経験を豊かにするとともに、社会的適応能力を養う （2）健康の回復・改善 ①健康の回復・改善に対する意欲と健康づくりの意識の向上を図り、自己管理能力を高める ②健康の回復・改善に必要な知識・技能を修得できるようにするとともに、情緒の安定を図る （3）基礎学力の向上 ①学習意欲を高め、自主学習の態度・技能を身に付けることができるようにする ②個に応じた指導方法を充実させ、児童生徒一人ひとりの特性、能力に応じた基礎学力の定着を図る	目指すべき姿の実現に向けた取組の概要	センター的機能の発揮及び、チーム学校として組織的・協働的に以下の項目に取り組む。 【1】専門性の向上　病弱教育に対する知識とスキルの向上 ICTを効果的に活用した授業や行事を行い、ICT活用指導力と授業力向上を目指す。 【2】キャリア教育の充実　児童生徒が将来を見据え勤労観・職業観を育む 病気と向き合いながら、将来や職業について考える力を育み、学習意欲を高める。そして、治療に向かう力にもつなげる。 【3】学校設定項目　多様な教育的ニーズに対する教育内容の創造 登校や学習への指導・支援に困難性が高い児童生徒の支援方法について学び実践する。 【4】働き方改革 計画的に年休を取得し、心身ともにリフレッシュし健康的に働く。 業務の精選と役割分担の見直しにより、業務内容を改善する。
《取組の方向性》	《6つの基本方針》 ①チーム学校の推進 ②厳しい環境にある子どもへの支援や子どもの多様性に応じた教育の充実 ③デジタル社会に向けた教育の推進 ④地域との連携・協働 ⑤就学前教育の充実 ⑥生涯学び続ける環境づくりと安全・安心な教育基盤の確保 《6つの基本方針に関わる横断的な取組》 ①不登校への相応的な対応　②学校における働き方改革の推進		児童生徒像	R5年度中に、目ざす児童生徒像をみんなで考えたいと予定 （以下はR4年度のもの） ・自分や周りの人たちを大切にできる児童生徒 ・目標をもち、自ら考え行動できる児童生徒 ・自分の将来に夢をもつことができる児童生徒 ・病気の回復や改善に必要な態度や習慣を身に付け、病気に負けず夢や希望に向かって進もうとする児童生徒		

《重点取組項目》

（評価　A:目標を十分に達成　B:ほぼ目標を達成　C:やや不十分　D:改善を要する）

項目		取組のねらい 【P】	現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容 【D】	中間評価 【C】		中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価 【C】		学校関係者評価		見直しのポイント 【A】
専門性の向上	病弱教育に対する知識とスキルの向上	◆ICTを効果的に活用した授業や行事を行い、ICT活用指導力と授業力向上を目指す。	（現状） 令和4年度には、全教員が週2～3回以上クロームブックを活用した授業を行うことができた。 （目標） 児童生徒と教師が授業でICTを日常的に利活用している。 ・全教員が授業の中でICT活用ができている（使用頻度一日1回以上）。 ・児童生徒が一日1回以上クロームブックを利活用する。 ・個別の指導計画にICT活用について記入し、計画的に利活用する。 ・授業研究会を各学部1回以上行う。 ・病気に関する研修会を行う（年2回）。 ・授業実践についての研修会を行う（年1回以上）。	・研究計画を立て、授業研究会を実施【研究部・各学部】 ・前籍校が使用しているサイトやアプリを使い、学習を進める。【小学部】 ・ICTを活用した教材研究を行う。【中学部】 ・病気や授業実践についての研修会の実施【研究部】 ・GIGAスクールサポーターによる研修の実施（年間8回以上）【情報担当】 ・音楽教室（のどカルテット演奏会）の実施（年2回）【教務部】 ・ボッチャ大会【小・中・教頭が主となり各1回ずつ】 ・行事の中でICTを活用する。	B	・小中学部とも前籍校と連携し、クロームブックを活用できている。 ・1学期には、病弱教育とICT活用について山梨大学の先生による研修会を行い、指導方法を学ぶことができた。 ・音楽教室は1学期に開催し、2学期も12月に予定している。 ・ボッチャ大会は12月開催予定である。	・ICT活用に関する教材を整理する。 ・研修内容を指導に生かし、授業を行い、その成果を校内研で確認する。 ・音楽教室、ボッチャ大会を実施し、成果と課題について検討する。	B	・県立と市町村教委でアプリが異なっており活用できなかった。 ・児童生徒はほぼ毎日、アプリやサイトなどを活用する姿が見られた。 ・実態に応じて前籍校とのリモート交流、教材づくりを行った。 ・ボッチャ大会に講師を招聘し、児童1名がリモートで参加した。	A	・新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、行事が少しずつ拡大された。 ・子どもに応じたICTの活用がされていた。 ・十分に達成している。	・ICT利活用についていっそう積極的に取り組み、効果的な活用事例を蓄積する。
キャリア教育の充実	児童生徒の将来を見据えた勤労観・職業観を育む	◆病気と向き合いながら、将来や職業について考える力を育み、学習意欲を高める。そして、治療に向かう力にもつなげる。	（現状） SDGsの学習は、児童生徒の学習状況に合わせて担任を中心に行った。学習の機会をもてない児童生徒がいた。 小中各学部が主となり、年2回ゲストティーチャーを迎えて、職業に関する学習を計画実施した。児童生徒の興味関心が強く、また授業を経験したことで職業選択の幅も広がった。 （目標） 学校全体でSDGs学習に取り組み、児童生徒が自分のできることを見つけ実施している。 学校評価アンケートでSDGsに関する項目を設ける。児童生徒の実施状況が70%以上（例：うがいの時の水を少なくした等） ゲストティーチャーによる職業に関する授業を実施する（年2回）。	・「国民的SDGsの日」の毎月17日にテーマを決めて理解を深める取り組みをする。（例：朝の会でクイズ） ・学校紹介ビデオ作り、テーマを決めて作品作りを行う。作品は病院や本校の学園祭で発表する。 ・1学期と2学期にゲストティーチャーによる授業を実施する。	B	・毎月17日前後で、SDGsクイズを行い、児童生徒がSDGsについて考える機会を設定できた。 ・学校紹介ビデオは、11月で録画が終了しており、12月中に完成予定である。 ・1学期には、病院の管理栄養士による将来の職業について考える授業を実施できた。2回目も計画中である。	・引き続きSDGsクイズを行い、在籍児が将来の地球環境について考える機会を設定する。 ・学校紹介ビデオの2作目に着手し、完成する。 ・ゲストティーチャーによる授業を実施する。	B	・毎月17日（国民的SDGsの日）頃に、15分程度で取り組んだ。 ・小学部3年児童が出演して学校紹介動画を作成した。 ・2回目のゲストティーチャーによる授業は実施できなかった。	B	・子どもたちは毎日楽しそうに登校しており、教育を受けながら充実した入院生活を送ることができた。	・子どもたちが意欲的に取り組める教育活動を病院と連携しながら更に充実させる。
学校設定項目	多様な教育的ニーズに対する教育内容の創造	◆登校や学習への指導・支援に困難性が高い児童生徒の支援方法について学び実践する。	（現状） 前籍校で不登校や不登校傾向の児童生徒が在籍することがあり、担任だけでなく学部や管理職、SCと支援方法について検討しながら支援を行った。行渋りの見られたこともあったが、好きなことを見つけて誘うと登校につなげることができた。 （目標） 不登校児の支援方法について教員間で支援方法が共通理解できている。 不登校児が在籍した場合には、支援計画を作成し、見える化して組織的に支援できている。 該当する児童生徒全員の前籍校に支援方法を引継ぎできている。	・高知大学医学部附属病院子どもこころ診療部より講師を迎えて研修をする（年1回以上）。（外部専門家） ・不登校児の支援について組織的に取り組む。担任や担当から情報を集め教頭が整理する。 ・認知行動療法についての学習会をする。 ・不登校児が転入した場合には、支援体制を組み、支援スケジュールを作り、支援を実施する。	B	・不登校児の支援について、病院関係者と支援会を開き支援方法を探ってきた。また、SCや不登校児の保護者の方からも話を聞く機会を設け、研修を行った。 ・不登校児の支援について病院と連携して支援方法を確認しながら支援を行うことができた。	・不登校児の支援について、文書化し整理する。 ・12月26日に、高知大学医学部附属病院精神科に所属の臨床心理士による認知行動療法についての研修を実施する。	B	・前籍校では休みがちだった子どもが休まず通う様子も見られた。「こっちの学校の方がえい」「勉強がわかる」といった声が聞かれることもあった。子どもの興味関心を中心に置いた自立活動の取り組み内容も、子どもの登校意欲につながっていると思われる。 ・日々話し合いを重ね子ども理解の取組を進めた。 ・短期入院期間の対応のため、実態把握をしながら支援方法を計画して評価することの難しさがある。	A	・子どもの背景を理解し、更に多職種で連携協働し支援できていた。 ・十分に達成している。	・教員間での子ども理解や支援方法の共通理解を更に進める必要がある。 ・前籍校への支援の引継ぎの充実に取り組む。
働き方改革		◆計画的に年休を取得し、心身ともにリフレッシュし健康的に働く。 ◆業務の精選と役割分担の見直しにより、業務内容を改善する。	（現状） 各教員が必要に応じて年休は取得した。 教員によっては年休消化ができていない。 年休取得が長期休業中に集中した。 業務内容の整理はできてきたが、業務量の平準化については着手できていない。 （目標） 教員の希望にそって年休取得できるように計画する。全教員が8月末で年休の残日数が20日以下となっている。 業務の量を把握し、担当を超えて見直しを行い、どの役割でも業務量の多少がないようできるだけ平準化している。 業務量が見える化できている。	・リフレッシュのための年休取得であり、全教員が取得するということを職場で共有、浸透させる。 ・労働安全衛生に関する職員への情報提供を行う（年3回）。【教頭】 ・業務を見える化し検討する。【教頭】	A	・夏休みには、全教職員が5日以上の連続休暇を取得できた。日直を譲り合うなど年休等の休暇を取りやすい環境となっている。 ・労働安全に関するテーマで職員会で時間を作ることができた。筋トレ、ヨガ、マインドフルネス等を実践した。また脳梗塞の予防、起こった時の対応も確認した。1学期に2回、2学期は1回実施できた。	・年休取得の促進、気持ちよく働ける環境づくりに全員で声を掛け合い取り組む。 ・12月、また3学期にも2回労働安全について考えたり、実践したりする機会を設ける。	B	・年休、病休等は学部を超えた協働によってスムーズに取得できた。 ・労働安全を目的に体を動かす時間を定期的に実行することができた。日常生活に取り入れることができるような運動の提案もしていけたらよい。 ・子どもが増え過ぎると、授業体制、教室の割り振りが逼迫する。 ・児童生徒の実態から、授業内容の工夫等個別の支援に費やす時間の増加につながっている。 ・業務量の見える化については十分に進んでいない。地域支援と研究部長の兼務は業務量が多くなっている。	B	・病棟稼働率が高くk多忙な中臨機応変に対応している。	・業務量の平準化に引き続き取り組む。